

キリストにある逆転

今朝はわたしたちの人格、人生の営みが、キリストの真実と出会うことによって、どのように変化するか、そのことを語るパウロの言葉から、示されることを聴いてゆきます。

喜びの手紙として知られるフィリピの信徒への手紙ですが、今日の箇所には「あの犬どもに注意しなさい。よこしまな働き手に気をつけなさい。切り傷にすぎない割礼を持つ者たちを警戒しなさい」と雰囲気を一変させる表現があって驚かされます。1章では「キリストを宣べ伝えるのに妬みと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もいます」と述べて、「黒い猫でも白い猫でもネズミを取るのが良い猫だ」という諺ではありませんが、福音伝道の前進に役立つならば自分が牢に入れられたことをどのように取られようが構わないという姿勢を示したパウロが、この「よこしまな働き手」「切り傷にすぎない割礼を持つ者たち」に対しては「犬ども」という最大の侮蔑の言葉を投げかけています。これは同族嫌悪というのでしょうか、この後の箇所を読んでいきますと、かつてのパウロ自身が属していたファリサイ派など、手紙では一般に「ユダヤ主義者」と言われることが多いのですが、彼らを「犬ども」と名指ししているようです。イエスをキリストと信じることによって神から与えられる信仰の義ではなく、割礼に代表されるような律法を守ることによって、わたしたちの側の行いによって神の前に立とうとする人々を「犬ども」とパウロは切って捨てるのです。5節以下にはじまるパウロの自己紹介は、彼らに対して、かつての自分はお前たち以上にユダヤ人のなかのユダヤ人、スーパーエリートだったぞ、と牽制球を投げる感じですね。そしてフィリピの信徒たちが惑わされないように、自分は既にそこを通り過

ぎ、新しいステージ、神がキリスト・イエスにおいて明らかにしてくださった恵みのもとに立たせていただいていることを明らかにします。順番に見てゆきます。まずパウロは、自分も誇ろうと思えば誇れなくはない、と断って、自分がイスラエルの12部族のうちベニヤミン族という名門の出であることから、ヘブライ人のなかのヘブライ人であると語り、律法においてはファリサイ派に属していたほど非の打ち所がない者であり、パーフェクトな存在であったが、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりの素晴らしさに一切を損失とみなすようになったと言い放ちます。生まれながらの地位や、努力の結果得られたとおぼしきものを抛り所とすることをパウロは否定するのです。逆にパウロはわたしたちが人生の損失と考える苦しみを積極的に肯定します。パウロがこの手紙のなかで繰り返し語る喜びは、苦難に縁取られた喜びです。その根拠はキリスト・イエスです。2章の、あのキリスト賛歌に示された主イエスの姿をパウロも生きようとしているのです。パウロは神に選ばれた民であるユダヤ人の身分でありながら、それに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、みずからの誇りを捨てて、キリストの死の姿にあやかろうとしている。十字架の死に至るまで従順であったキリストをまねび、その道をたどり、いま牢獄に捕らえられ、死を予感している。けれどもくじけていない。かえってフィリピの信徒たちが驚くような喜びに満ちた手紙を苦しみの只中から出している。それは彼が弱さの中で働く神の力、十字架に示された神の深い愛を知って、自分の力によるのではなく、主の恵みに与って生きるすべを見いだしたからです。パウロは死が終わりではないことを知らされた。キリストに結ばれて死を迎えるならば、全ての問題は解決されていることを信仰によって会得したのです。キリストが

十字架の死ののち、復活されたように、自分もキリストの苦しみに与ることで、キリストの復活の姿にもあやかれるだろうと信じ、そこに達したいと希望している。そうみずからの胸の内を明らかにしています。復活こそ、彼の希望の源なのです。先週はこちらに重点をおいて説き明かしたのですが、今日、思いを深めたいのは、キリストのゆえにわたしはすべてを失いましたが、それを塵芥と見なしていますと語る価値観の変化、苦難や死を喜びの中で見ることの出来る生き方の変化です。説教題の「キリストにある逆転」とはそのことを指しているのですが、それを解く鍵が、パウロが9節で語っている「わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰にもとづいて神から与えられる義があります」という部分です。これは信仰義認というプロテスタント教会の生命線ともいべき教えです。生まれながらの人間は自分の義を立てるために生きている存在とあってよい。顔や面子（メンツ）と考えるとわかりやすいかもしれません。自分の顔をたてる。顔役とか、顔向け出来ないなんていい方もありますね。わたしたちは一廉の人間になろうとし、自分の義をたてて生きてゆく。「義」とは正しさ、とくにかたちの正しさを指す言葉です。ことがらが正しい位置に収まっているときにその状態を義とあらわします。いまわたしは顔やメンツという表現をしましたが、聖書でいう義は神さまとの関係が正しいことを言うのです。つまり、人間が神さまを神さまとし、自分を神としないならば、その人間の神さまとの関わり方は正しいもの、すなわち義とされます。十戒の第一戒「あなたにはわたしをおいて他に神があってはならない」という教えはこのことを指しています。人間が神さまを神さまとするということは、神さま以外のものを拠り所にしないということです。しかし、神さまではなく自分が神の位置

にくるのです。自分の力や、お金や、健康や、知識や、数が多いと言ったことが神から離れて自分を支える拠り所となる。そうした見当違いを聖書は罪と呼びました。神無しで生きようとするのが諸悪の根源なのです。自分の顔を立てることではなく、神のみ顔を仰いで生きることには救いがあるのです。自分が世界の中心であるかのように生きる天動説的人間から、神を光と熱の、つまり命を育む中心と捉え、この方を仰ぎつつ生きる地動説的な人間へ変わることが救いの第一歩です。パウロは、主イエスと出会い、そのことに気付かされたのです。

先週、わたしは名古屋学院中学と高校の入学式に出まして、式典の最後に祝祷をしました。中学1年生は13歳、235名の入学でしたが、本当にまだ小学生ですね、男の子は特に。それが高校3年生ともなればぐっと大人びてきますから、この6年間というのは本当に身体も心も精神も大きく成長する時期だと思わされました。新入生代表の挨拶や、在校生代表の挨拶、校長先生の訓示、そこに交わされる言葉を聴いていまして、教育が人間の成長に必要なものであることは当然なのですが、どういう存在として成長するように方向づけるかということについて考えさせられました。教員の方々が当たり前のように使う3年後には自己実現して希望の大学へというフレーズを耳にしますと、やはりパウロがかつて誇りとしていたような自分はどこそこの出身で、どこそこを出て、こういう面では非の打ち所がなくといったような人間的に見て成功者というところ、つまり自分の顔を立てる教育、それはそれで社会が要請する「正しい」ありかたが見て取れる。それはわたしたちの社会が発信している基本的なメッセージであり、幼いときからわたしたちはそれを当たり前のものでして受け止めている。この世界で生きるルールのようなものですね。それはより高いところへ、仕える者

ではなく、より仕えさせる者へと進む道です。「主を畏れることは知恵の初め」という弁えがなく、知識だけを与えていこうとするならば当然そうなります。キリスト教主義を掲げる学校ですが、なまじ有能なだけに、そうしたものを拠り所とするのではない生き方を受け入れるのは一筋縄ではいかない。「敬神愛人」がスローガンではなく、出会いの真理として神さま自身が備えてくださるのでなければ人間は自分の義を立てる生き方、自分を誇る生き方から逃れることは難しいと思わされたことです。パウロも自力で、そこから解放されたものではありません。死者の中から復活された主イエス・キリストに呼びかけられることによって、三日間は肉体の視力を失ってしまい、目から鱗のようなものが落ちて初めて新しい生き方へ目が開かれたのです。

「わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰にもとづいて神から与えられる義があります」と、自分で自分の顔を立てるのではなく、神の御顔を仰ぐ生き方。それによってこれまでクズと見えていたものが宝に、これまで誇りとしていたものが一銭の価値もないものになりました。神を中心として生き方を整えることによって、開かれてくる世界がある。この世の算盤勘定や、コストパフォーマンスといった損得では測れない人生の価値に目を開かれたのです。キリストへの信仰による義とは、自分の顔を立てるのではなく、神さまの顔を立てることです。すなわち、神さまが差し出された救いをそのまま受け取ることです。神さまが、あなたにはわたしの子が必要だと仰って、独り子であるイエス様を下されたのですから、この方をわたしの救い主として共に歩むのです。神さまの判断は、わたしたちをご覧になって、あなたたちにはわたしの子が必要だ、これに聴き、共に生きなさいと与えつくされたのに、必要ありません、わたしは自分でやれます、わた

しの顔を立てて生きてゆきますというのであれば、神を不要な存在、偽り者とすることになります。義とは神さまとの関係、関わり方が正しいことだと言いました。神さまが与えてくださった救い主をそのまま受け取ることで、わたしたちは「罪人」になります。自分を一生懸命よく見せようとしたり、他人との違いを懸命に見いだして、お前よりもましな人間だと誇るような生き方から解放されます。キリストの十字架に示された神の判決を受け入れ、信仰によって罪人になり、神の御子を救い主として頂くことが神さまとの正しい関わり方、信仰による義に生かされる歩みなのです。それは自己採点方式から解放され、恵みによって生かされる歩みの始まりです。そうしますと、神さまとの関係において平和を得ていますから、どのような場所に置かれていても安んじておれる。キリストがわたしのために最も低いところに降られ、贖いとなって下さったことを知るゆえに、自分の弱さも低さをも受け入れて生きることが出来る。この信仰によって得られる知恵、恵みによって生きる平安、すなわちキリスト・イエスの福音にパウロはすべての人を招きたいと願っているのです。この消息に生かされたく願います。

お祈りいたします。